



橋野鉄次郎さん



太鼓

打楽器の一種で、木または金属の円筒形の胴の両面に皮をはり、ばちや手打ちで鳴らす楽器。「太鼓もばちのあたりよう」と言う言葉がある。これは、太鼓を強く叩けば大きく響き、小さく叩けば小さく響くように、やり方によっては相手の反応も違うことのとたとえられている。

黒潮太鼓

昭和21年（満17歳の時）戦後始まった盆踊りでの太鼓が、私と太鼓の出会いでした。早く、遅く、高く、低く、この4通りの叩き方が、種々な情景を表現することの素晴らしさに魅せられて、生涯の趣味として太鼓を選択しました。昭和45年、私は留萌太鼓を結成し、オリジナル曲を作って発足しましたが、昭和50年、小樽の海上保安庁に問い合わせたところ、瀬戸内海の黒潮が年2回、日本海の留萌沖を通過し、宗谷海峡を通過して元に戻ることを聞き（黒潮太鼓）と命名しました。昭和50年代の前半、北海道観光協会からのお誘いで、北海道物産展のアトラクションで大宮市、岡山市、千葉市などの有名なデパートで演技をさせていただけたこと、札幌市、旭川市を始め、全道10数ヶ所で留萌市の物産の紹介を、私

たちの太鼓を通じてアピールした処です。これは、私たちの演技などを通じて留萌市を道民の皆様を紹介するのが本意であって、黒潮太鼓そのものではありません。しかし、私たちの技術も評価されます。そのためには、熱心な練習の積み重ねが必要です。ただ残念なのは、留萌市に大学が無いために、中学・高校時代に育てた子供たちは、高校を卒業すると、旭川、札幌、本州へと向かっていき、卒業すると留萌には帰ってきません。若い人たちが育たないのが大きな悩みです。今は、40代から50代の人たちが元気で頑張ってくれています。現在私たちの会は12名ですが、何とか現状を維持していきたいと考えています。以前は婚礼や大きな会議、行事には必ずお呼びが掛ってきましたが、最近はカラオケが主体となっ

ています。全国的には次第に太鼓が見直されてきています。各種会合での出演回数も増え、その機会に留萌市のアピールも積極的に行っているように考えています。留萌の祭りには、太子祭、留萌神社祭典、呑涛祭りなどがあります。その中で特に市内を練り歩く留萌神社祭、あんどん祭りは多くの市民が関心を持っています。港祭りのあんどんや花火大会は何と言っても市民全てが楽しめるものなので、長く続けてほしいと思います。祭りに携わる人々には本当にご苦労さんと言いたいし、感謝の気持ちで一杯です。私もそろそろ70歳。最近では身体の動き、疲労度など、思うようにならなくなってきたのが残念ですが、致し方ありません。代わりが必要になってきたようです。

女みこし翠蓮会

1年に一度、粋で素敵で前向きに明るく。そんな自分自身を発見できることが翠蓮会と思っています。参加したのは年々参加者が少なく、継続が危ぶまれると聞き、少しでもお役にたちたいと参加致しました。雰囲気は粋でいなせで永年培かっていた祭りの雰囲気をそのままいっきりに出してみたい。最近はやさしいソーランとか、はねとに押されざみですが、時代に流されない祭り気分は御輿ではないでしょうか。しっかり継続したら町興しになるとおもいます。粋、そしてあでやかさを伝承しながら、若い女性だけじゃなく、自ら楽しんで参加してもらおう体制を作り、年齢に関係無く楽しんでもらいたい。翠蓮会は留萌ならではの女御輿です。浜の女性の粋、やさしく気

性の強さも加えて、留萌の女性をしてもらいたい。今までのしきたりを大事にしなが、新しいイメージを作り上げ、楽しく和を大事に沢山の人が夢を作り上げていきたい。それぞれのお祭りでは実行委員の方々が大変な努力と苦勞をしながら祭りを盛り上げようとしています。市民全員が楽しむ祭りとして、沢山の参加を希望し、楽しんでほしいと思います。留萌に生まれ育って、祭りを身近に見てきました。小さい頃は髪を結い、着物を着るのがとても楽しかったです。留萌の祭りは見る祭りから参加するお祭りに変わってきました。自分自身が楽しく、その日だけでもお祭り小僧に徹して、恥ずかしがらずに一歩進んだ勇氣を持って参加し、その日を完全燃焼してい

きましょう。今までは年齢制限などの規制がありました。これからは自由に楽しめて、そして自由に行動できる体制を作りたいですね。一つの御輿には最低でも40人くらいの担ぎ手が必要で、重たい御輿を代る代る担ぎ、声を掛け合いながら前に進みます。祭りは伝統を守り、古い物を残していくことが大切なことだと思います。でも、新しい時代に若者が求める活気や元気を、取り入れていくことも大切なことだと思います。今回は、太鼓を叩きながら御輿の行列を楽しんでもらいたいと思っておりますので、皆さんからの掛け声や熱い応援をよろしく願っています。



佐藤信子さん



御輿

祭りの時などに、神体・神霊を乗せて運ぶために使われる。「御輿を上げる」とよく言われるが、これは落ち着いているのをやめて、行動しはじめることを言う。留萌の神社祭でも、御輿を積んだ車が市内を練り歩くのを見かけるが、車の無い時代は、瀬越町から元町まで、船を使ったそう